仲間

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仲間

【Ｎコード】
Ｎ２２５７Ｚ

【作者名】
ヒロ

【あらすじ】
どこにでもある高校で、どこにでもある学級が有名になった。７日間のうちに僕たちはいろんなことを学び、いろんなことが起き、いろんなことを乗り越えようとした。そして…。

第1話　1日目・朝（前書き）

お待たせいたしました！
新作ができました！　いつもとは違い、恋愛ではありません…（？）
ま…まあ、少しは恋愛も入ってますが…。
これから楽しんでもらえるように頑張りますのでよろしくお願いします！

第1話　1日目・朝

1年2組。ごくごくどこにでもあるような普通の学級。そんな学級が今や全国的に有名な学級となっていた。僕たちが過ごしたあの7日間…。あの7日間が僕たちを変えていった。

「孝弘(たかひろ)。忘れ物は無い？」

「母さん。もう入学してから1ヶ月が経つんだよ？　それに高校生なんだから大丈夫」

「いやね、孝弘。田中(たなか)家は忘れんぼうが多いからね～」

午前8時。僕はいつも通り家を出て学校へと向かう。母さんはかなりの心配性で毎朝、忘れ物が無いかを聞いてくる。僕は今年4月から高校生になった。全く…高校生の僕が忘れ物をするなんて…。

「……教科書忘れた」

昨日、勉強をしようと思って机に出していたことを忘れてた。まあ、勉強はしなかったけど。くっ…何たる失態だ。

「おーい、孝弘」

僕がそんなことを考えてるとバカでかい声が少し離れたところから聞こえた。

「正か…」

やってきたのは松本正（まつもとただし）。僕の小学校からの悪友（あくゆう）だ。

「おはよう。そんなガッカリしたような表情するなよ」

正は来てすぐにそう言った。……僕、何も言ってないぞ？

「おはよう。正、それがわかってるなら声の大きさを考えろって」

僕が言うと正は独特の笑い方で笑った。その笑い声も…大きい。思わず耳を塞ぎそうになる。

「おはよう。松本くん、田中くん」

次にやってきたのは相沢恵（あいざわめぐみ）。僕と正とは中学校からの同級生。高校でも同じクラスになった。

「お前ら、まだ呼び捨てじゃないのか？　そろそろ付き合い始めてから3ヶ月だろ？」

正がちゃかすように言う。そう恵は僕の彼女である。数人にしか言ってないのでほとんど知られていないのだが…。

「僕は恵って呼んでるけど、恵が恥ずかしいって」

僕がそう言って恵の方を見ると少し慌てた様子で何かを言おうとしている。

「松本くんにはわからないもん。私の気持ち」

「そうか？　まあ、相手が孝弘だからな～」

正が残念そうな目で僕を見る。

「何だよ？」

「んにゃ。何でも」

僕が怪しそうに正を見ていると正ではなく恵が笑った。

「あはは」

「恵まで…。僕をバカにするなー」

「やべっ。恵ちゃん、逃げるぞ」

「うん！」

逃げる正と恵を追いかける。何と言っても2人は逃げ足だけは速い。

「こらー待てー」

「待てと言われて待つバカがいるか。早く来いよ、孝弘！」

正が挑発してくる。そんな様子を見てか、恵は笑っていた。

「くそ。相変わらず逃げ足だけは速いんだから…」

結局、僕は学校に到着するまで正と恵を捕まえることができなかった…。

「はあ、はあ…」

学校に到着した頃には僕の息が完全に上がっていた。

「大丈夫？」

恵がそっと駆け寄ってくる。思わず膝をついていた僕は恵の肩を借りて立ち上がる。

「全く…。こんなんで息が切れるとは…恥ずかしくないのか？」

正が嫌みのように僕に言う。

「うるさいな～。僕だって情けないと思ってるよ」

いつもこうだ。僕は運動音痴で体力も全然無い。

「少しは運動しろよ」

対照的に正は運動ができて、これくらいじゃ体力が余っているくらいだ。少し羨ましく思うことがあるほどだ。

「そろそろ教室行かなきゃ。怒られちゃう」

腕時計を見ながら恵が言う。僕も壁にかかっている時計を見た。あと5分しかなかった。

「ほんとだ。早く行かなきゃね」

僕たちは急いで教室に向かった。教室に入るとさすがにほぼ全員が教室にいた。僕たちが入ってすぐに担任の中村巧（なかむらたくみ）先生がやってきた。

「今日の予定は…」

中村先生がいつものように話していく。僕は眠たい目をこすりながら聞いていた。

「1時間目は国語か…」

先生の話が終わり、僕は授業の準備をする。いつも通り変わらない1日が始まった。僕はこの時、昼間にあんなことが起こるなんて知るはずもなかった…。

第1話　1日目・朝（後書き）

読んでくださってありがとうございます！
いよいよ始まった1年2組の7日間。一体これから何が起きるのか、どうなっていくのか…。
第2話目もよろしくお願いします！

第2話　1日目・昼（前書き）

第2話目です！

いつも通りの1日を過ごしていく孝弘。

昼休みになって…。

第2話　1日目・昼

『キーンコーンカーンコーン』

午前の授業が終わり、昼休みの始まりのチャイムが鳴った。

「田中くん…ずっと寝てたでしょ」

恵が笑いながら僕のところにやってくる。昼休みはいつも一緒に弁当を食べることにしているから。

「孝弘、寝てたのか」

正が僕の席の横を通りながら言う。そう言ってる正も眠たそうにしてる。

「松本くんもずっと寝てたでしょ」

恵がそう言うと正は『バレた？』と言って笑って誤魔化していた。まあ、誤魔化せてないけど…。

「はあ、午後の授業なんて中止になっちゃえばいいのに」

僕が呟くと恵は何も言わずに笑っていた。弁当を食べながら恵とたわいのない話をする。僕が学校に来る最大の目的である。この時間が無ければ学校には来ないかもしれない。

「ふざけんじゃねえぞ！」

そんな楽しい時間を過ごしていた時だった。廊下から誰かの怒鳴り声がした。静かだった教室がザワザワとざわつく。

「何だろうね…？」

恵が僕を見ながら言う。僕も何が起きたのかわからず、何も言えなかった。次々とクラスメートが教室を出て行く。僕と恵もゆっくりと教室を出た。

「お前が悪いんだろうが！」

「うるせえ！　悪いのはお前の方だろ！」

廊下では2人が取っ組み合いのケンカをしていた。先生も慌ててやってきて止めようとしているが、ケンカは収まりそうにない。

「あれ…正じゃないのか？」

はっきりとは確認できなかったが、ケンカしている2人のうち片方は正のようだ。全く…アイツは何をやっているんだか。僕はため息をついて正を助けに向かおうとした。その時だった。

『ガシャン！　パリーン』

僕は言葉を失った。大きな何か割れる音と共にケンカしていた2人の片方がいなくなった。ここは3階だ。まさか…。

「いいや。そんなことがあるはずはない」

僕は自分に言い聞かせながら言った。

「田中くん…何が起きたの？」

心配そうに恵が僕に言う。恵はずっと僕の腕にしがみついていた。

「わからない…。ちょっと見てくるから、恵はここにいること」

僕が言うと恵は無言のまま頷いた。あちこちから悲鳴が上がる中、僕は人混みをかき分けて窓の近くまでやってきた。そこには予想通りと言っていいのだろうか、正の姿はなかった。ケンカしていたもう片方の生徒は『俺のせいじゃない』と何度も呟きながら震えていた。先生は急いで1階に向かったみたいでここにはいない。僕はガラスの破片に気をつけながら慎重に割れた窓から下を覗いた。

「正…」

嫌な予想は当たってしまった。ケンカの勢いで正は3階から1階へと転落してしまったのだ。僕は見るのをすぐにやめた。これが現実なのかもわからない。ただただ、怖かった。

「田中くん？」

その時、後ろから声がした。僕が振り返るとすぐ側に恵がいた。

「バカ！　来るなって言っただろ！」

僕は思わず恵に怒鳴ってしまった。いつもなら泣きそうな顔になる恵が今日は強く前を向いていた。

「ごめん。何があったか知りたくて…」

僕は何も言わずに恵の手を取った。

「田中くん…」

「大丈夫。絶対に大丈夫だから…」

今の僕に言えることはこれだけだった。廊下に響き渡る悲鳴は収まる気配がなかった。

午後の授業は全て中止になり、緊急の全校集会が行われることになった。全生徒が体育館に集められ、体育館の中は異様な雰囲気に変わっていた。

「今日あったことは、ここにいる全員の責任である」

校長先生の一言目である。それまで静まり返っていた体育館が少しざわついた。

「静かにしなさい！」

そんな生徒達の様子を見て、校長先生は怒鳴り声を上げた。1年2組の生徒の中には泣き出してしまう生徒もいた。

「今日の出来事はもちろん、ケンカしていた2人に原因はある。し

かし、見ていた生徒は2人を止めなかった。ただ見ていた。これは先生方にも言える。今回のことは学校全体としての責任でもあることを忘れないように。また、松本くんの状態だが…かなり厳しい状態が続いている。元気な松本くんが戻ってくるよう願う。以上！」

校長先生の言葉を聞いた僕たちは何も言えなくなった。全校集会は校長先生の話で終わった。しかし、まだ帰れる訳ではなく、各クラス教室で待機ということになった。教室に帰ってきたのはいいものの…誰一人として話をする人はいなかった。時間がゆっくりと過ぎていく。僕は時計を何回も見たり、周りをキョロキョロしたり、とにかく落ち着かなかった。早く正のところに行って様子を知りたい。不安と心配に押しつぶされそうだった。それは恵も同じのようだった。ずっと下を向いたまま、恵は動かずに何かを考えている。

『ガラガラ』

どれくらい時間が経っただろうか。ようやく教室のドアが開き、中村先生が入ってきた。

「やっと職員会議が終わった。今日は一斉下校になった。もちろん部活も無しだ。寄り道せずに真っ直ぐ帰るように」

中村先生は終始疲れたように話を進めた。僕たちは、そんな中村先生の話を何も言わずに聞いていた。

「今日は大変なことがあった。その事実は変わらない。けど、これからどうするかが大事だ。とにかく今日は疲れただろ？　ゆっくりと休んで、また明日から頑張ろうな」

中村先生の話が終わる。それぞれ帰る準備を始めた。いつもなら

賑やかな帰り仕度。今日はシーンと静まり返っていた。僕は何も言わずに恵を見る。僕の視線に気がついたのか恵がゆっくり頷いた。僕と恵は教室を出て、職員室へと向かった。

第2話　1日目・昼（後書き）

読んでくださってありがとうございます！
いつも通り変わらない1日になるはずが…。予期せぬ出来事が起きてこれからどうなっていくのか。そして、正は…？
第3話目もよろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2257z/

仲間

2011年12月10日00時58分発行